

## テーマ 学級における特別なニーズのある子への指導

### (1) 研修の概要について

文部科学省が行った全国調査によると、通常学級において特別な教育的支援が必要だと思われる子どもが、6.3%にのぼることが明らかになった。その中に相当数含まれると思われるADHD、LD、高機能自閉症の子どもたちを従来の特殊教育の範疇に加えた特別支援教育が提唱されている。その理念は、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」にまとめられ、既に、各地でモデル事業も始まっている。

しかし、これら特別なニーズのある子どもたちは、突然現れたわけではなく以前から存在しており、彼らに関わる優れた実践も行われてきた。本論文では、今提唱されている特別支援教育の理念が、すでに過去の優れた教育実践にも表れていることを明らかにし、その上で、今後の課題を追究する。

第1章では、社会における気がかりな子の捉えられ方と、特殊教育から特別支援教育への変遷とを確認した上で、特別支援教育の理念を洗い出し、その問題点を追究する。そして、既に特別支援教育を行っている学校のとりくみをいくつか紹介する。

第2章では、特別支援教育が提唱される以前から行われていた特別なニーズのある子を中心とした学級づくりの実践を分析する。その結果、通常学級において担任はどのように特別なニーズを理解し、その子をどのように学級に位置づけていったかを明らかにする。また、どんなに力量のある教師でも、一人の力では限界があり、教師自身が同僚や保護者、外部機関と繋がる必要性も説く。

第3章では、今後特別支援教育を推進していくにあたっての課題を追究する。一番に考えられるのは、教師自身の意識改革である。一人ひとりの子どもが異なるニーズをもっているが、その中でも特に特別なニーズのある子に対する理解を深め、全教職員が共同して支援にあたらなければならない。共同するためには自分の実践をオープンにできることが求められる。また、すべてを教師に委ねるのではなく、外部機関との連携がスムーズに図れるようなシステムづくりも欠かせない。さらには、一人ひとりのニーズに対応しやすい学校にするために、学級定員や教職員数などに関する教育制度の改革も待たれるところである。

#### 章立て

- 第1章 特殊教育から特別支援教育へ
  - 1. 気がかりな子
    - (1) 気がかりな子の存在
    - (2) 一般社会の捉え方
    - (3) 注目される理由

- 2．特別なニーズ教育の在り方
  - (1) 特別支援教育へ
  - (2) 「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」
    - 軽度発達障害
      - 学習障害
      - 注意欠陥および注意欠陥多動性障害
      - 高機能自閉症
    - 「最終報告」の理念と問題点
      - 特別支援教育の対象
      - 特別支援教室
      - 教員の研修
      - 特別支援教育コーディネーター
      - 特別支援学校のセンター化
  - (3) 先進校のとりくみ

## 第2章 すぐれた教育実践の考察

- 1．特別なニーズのある子をまわりと繋げる
  - (1) 特別なニーズのある子を理解するために
    - ありのままを受け入れる
    - 肯定的な評価の優先
    - 個別対応の時間の設定
    - 特別なニーズへの共感
    - 特別なニーズの理解
  - (2) まわりと繋げるために
    - 関わらざるを得ない場の設定
    - 活躍の場の設定
    - キーパーソンの存在
    - 関わり方の伝授
- 2．教師がまわりと繋がる
  - (1) 親との共同
  - (2) 教職員との共同
  - (3) 外部機関との共同

## 第3章 今後の課題

- 1．教師の意識改革
  - (1) 特別なニーズへの理解と感性
  - (2) 共同性
- 2．教育条件の整備

( 1 ) 校内システムの構築

( 2 ) 外部機関との連携

( 3 ) 教育制度の改革

学級定員

教職員数

専門的資格・資質の向上

## ( 2 ) 研修成果の活用について

私は通常学級しか担任したことはない。今までに何人も「気になる子」や「特別な困難のある子」(軽度発達障害のある子)に出会い、その度に「私の指導はこれでいいのだろうか」という不安を抱えてきた。今回の研修の機会を得たとき、まずは、自分の不安を払拭するためにも軽度発達障害について学びたいと思っていた。

最近は、LDやADHD、アスペルガー症候群などという言葉をよく耳にはしていたが、よく理解できないままでやり過ごしていた。これらの発達障害について学ぶうちに、二つのものに出会った。一つは、「特別支援教育の在り方について」という報告書(現場にいるときは、全く知らなかった)であり、もう一つは、通常学級で行われている過去及び現在の優れた実践である。報告書で述べられている理念には概ね賛成できるが、その実現のためにはたくさんの課題があると感じた。また、優れた実践を分析していく中で、現場にいる私たちがもう少し特別支援教育について理解を深めれば、今のままでも取りくめることがあるのではないかと思えるようになった。

まず、やらなければならないことは、特別なニーズについての理解である。「困った子だ」と嘆くだけでなく、どこにどんな困難を抱えているのか、どうすればそれを少しでも軽減できるのかをしっかりと見極め、それを自分ひとりのものとせず、周りにも伝えていくことである。そのためには、学校の中に自由に話し合える雰囲気があることと、協力体制をとれるシステムがあることである。それは、なにも特別な委員会を設けなくとも、既存の組織をうまく活用すればすむことである。

特別なニーズへの理解がすすむと、そのニーズに共感できるようになる。そうすると、なんとかみんなと同じ行動をさせようとしてイライラすることが少なくなる。私の学校にも多様なニーズを抱える子がいる。自分のやりたいことしかできない子、うまくコミュニケーションがとれずそのたびにパニックになる子、不登校気味の子、人前では声を発したり自由に動いたりできない子、読み書きの能力が極端に劣る子・・・これらの子どもたちを困った子だと捉えるのではなく、「困っているのはその子たち自身なのだ」と捉えることで、私たち教員も、周りの子どもたちも優しくなれるように思う。

ゆったりと優しい気持ちで子どもたちの特別なニーズに向き合えるようになったことが、この二年間の研修の一番の成果である。また、これを、自分ひとりのものとせず、少しずつ周りに広げる努力をしていくことが今後の課題である。学んだ知識を現場に還元し、無理のない校内システムの構築に向けて、この研修の成果を活用していきたい。